
白銀の蝶

祠

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の蝶

【Nコード】

N6754G

【作者名】

祠

【あらすじ】

夜になるとヒトを食う妖が、うろつろしている現在^{いま}。上質な物語は、妖魔に怯え、震える夜を過ごさなくてはならない人々にとって、心のよりどころであり、明日への希望だった。飛脚上がりの編集者ロバートは、一ヶ月前から音信不通になっている作者の原稿をゲットすべく命をかけて、竜の森に挑む。

ロバート・ロックの事情

「ロック君。

今回は、ユウエルまで、童話の原稿を取りに行ってくれたまえ」

「…………え？」

編集長の、ハラが減ったから、そこらの屋台で昼飯を買って来い。

…………みたいな、軽い言いぐさに、僕は、思わず、目をむいた。

「ユウエルですか！？」

あそこは、竜が山ほど住む森を越えて行く街ですよね！？

そこに…………僕一人で行くんですか？」

「そうだ」

「…………竜って、人間を食う上に、強くて賢いから。

捕まったら最後、強力な魔法使いや剣士でないと生きて帰れない

…………
……ってウワサを…………」

「ああ。

それは、ただの噂じゃなくて、本当のことだ」

「げ」

そんな場所に、僕をやる気なのか？

この編集長は！

僕は、命が惜しいぞ！

「……あの……」

僕は、剣士でも、魔法使いでもありません。

ただの飛脚あがりの編集者なので、その仕事は荷が勝ち過ぎるんじゃないかなあ……と」

「大丈夫だ。

要は捕まらなかったらいいんだろう？

お前は、弱いが、速い」

そう言つて、編集長は、僕の両手をガシツと握った。

「夜になるとヒトを食う妖が、うろつろしている現在^{いま}！
上質な物語は。

妖魔に怯え、震える夜を過ごさなくてはならない人々にとって、
心のよりどころであり、明日への希望だ！

ロバート君。

君の双肩には人間の未来への希望がかかっている！
是非行つて原稿をゲットしてきたまい！」

さあ、夕日に向かって走ろう！

みたいなノリに、思わず「はいっ！」と応えかけて、僕は危うく
踏みとどまった。

「やっぱり、僕……」

お仕事より、命の方が惜しいですう……」

「……お前も、たいがい、面倒クサイ、ヤツだな」

僕の泣き言に、編集長は、口をへの字に曲げた。

「りるる・ふえありーの原稿が届かないから、次の本が作れない、と騒いでいたのは、お前だろう？」

誰が行っても命を賭けなくてはいけないのなら。

一番のファンが原稿を取りに行くのが道理じゃないのか？」

編集長の言葉に、僕は目を丸くした。

「……りるるちゃんて、ユウエル出身だったんだ……」

そう。

植物から紙を作る技術と、活版印刷、という印刷方法が発明されて以来。

手軽に作られる「書物」は、魔法使いだけのものではなくなった。

研究や、勉学以外に、何か、面白いモノが作れないかと考えた結果。

僕たちは、人類初の娯楽誌を作り、一般の人々に売っている。

「書物」を読んで楽しむ、という習慣はまだ始まったばかりで、読者は一般人だったけれど、書き手は、まだ魔法使いが多かった。

「りるる・ふえありー」は、そんな書き手の魔法使いで。

色鮮やかな花や、可愛い草食動物の話を童話にして書いていた。

しかも、ただキレイな物語っただけじゃない。

ものすごく、心にしみる話ばかりで。

僕は、何度りるちゃんの原稿を読んで、泣いたり笑ったりさせてもらったのだろうか。

文章は、書いた作者の人柄って言う奴を写すって話を聞いたことがある。

僕は、心優しい女性が書いたような、りるちゃんの話が大好きだ。

そして、りるちゃんの蝶も。

りるちゃんは魔法使いらしく、書いた原稿を、白銀色の蝶に変えて送ってくる。

その蝶がまた、夢のようにキレイで。

僕はいつもりるちゃんの蝶を心待ちにしていた。

なのに。

たしかに。

ここ一ヶ月ほど、原稿の蝶が飛んで来ないことは確かだ。

だから。

「どうだね？

ロバート君。

ちよっと思つて、りる・ふえありーの様子を見てくる気は無い
かね？」

という、編集長の悪魔のような微笑みに。

僕は、思わずうなづいてしまったんだ……

ドラゴン・スレーヤーズ

ぎゃっははははは！

荒くれ共の豪快な笑い声に、僕は、酒場の扉を開ける手を止めた。

うっ。入りづらい。

僕だって、お酒は好きだし、酒場には行くけれど。

もうちょっと洗練された場所が好みだ。

扉が閉まっているのに。

安酒と、風呂とは、何日も縁がなさそうな男達の臭いが判るようなド汚い酒場なんて。

本当は近寄りたくも無い。

でもここに、憧れのりるるちゃんがいるんだ。

せっかく、竜の森を決死の覚悟で走り抜けて来たのに、ここで帰るわけには行かなかった。

えいやあ、とばかりに気合い一発、酒場の扉を開けた、そのとた
ん。

がらん がらん！

扉の端についた、莫迦デカい鐘が、大きな音を立てた。

と、同時に。

男達は、一斉に、入って来た僕を見た。

「なんだ、てめえは？
見慣れねえ奴だな」

いきなり。

しん、と静まり返った酒場で一人の男が声を掛けた。

太い、丸太のような腕に、不精髭。

おまけに、片目は、何かに引き裂かれたかのように、無い。

いかにも、この場を取りまとめているような男だった。

そいつに、ぎろり、と睨まれて、僕の繊細な心臓は、一瞬、止ま

りかけ。

僕は、生唾を飲み下して、ようやく声を出した。

「えつと……」

ここに、りるる・ふえありーというヒトは、いませんか？」

「なんだあ？」

そんな、可愛い名前のお嬢さんが、この中に、居ると思うのかあ？」

僕のすぐ側にいた、痩せこけた男が、ゲラゲラと笑う。

……僕だつて居るとは、ちつとも思えないけど。

編集長からもらった、りるるちゃんの主な居場所のメモが、ここだっただ。

メゲそうになった自分を励まして、僕は、精一杯、大声を出した。

「でなければ、紙を蝶に変える魔法が使えて……ここ一カ月くらい、いつもと様子が違う方は……？」

「紙とは限らず、ナイフとか、食い物なんかを蝶に変えて遠くに飛ばす事が出来るヤツなら、知ってるさあ」

「それで、銀の蝶を飛ばす女性はい？」

痩せた男は頭を掻いた。

「何色の蝶かまでは知らねえが……

蝶使いの女といえば、盲目の女魔法使いジルヴァラがそうだな……でも。

ジルヴァラは……

……死んだよ」

「なん……！」

そ、それは、いつ！
どうして！」

あまりのショックに。

男に掴みかからんばかりに詰め寄ると、彼は、肩をすくめた。

「丁度、一ヶ月前。

竜に食われてあっさり、あの世ゆきさ」

！

一ヶ月前って言ったら。

丁度、りるるちゃんの蝶が来なくなった頃だ……

僕は、へたへたとその場に座り込んでしまった。

あの、優しい物語を書く童話作家は

……死んでしまったのか……

今、現在。

この世界では、ヒトはそんなに弱い存在ではなかった。

さまざまな妖の住む森を開拓し、道を作り、旅人や商人は、街の間を行き来する。

しかし。

ヒトの強さは、圧倒的ではなかった。

太陽が落ちれば、妖達は、街に帰れず、道に残った人々を喰らい。

あるいは。

高い塀に囲まれて、安全なはずの街の中でさえ。

隙を見て進入しては。

子供をさらって食うこともある。

だから。

ヒトの「死」は。

僕にとっては、そうめずらしいことでもないはずなのに。

りるる・ふえありーという、作家の死は。

僕にとって……

いや。

彼女の童話を心待ちにしているものにとっても、きっと。

深いダメージを与える事になるだろう。

りるるの描く世界は。

ヒトが生き抜くためには、辛すぎる現実から一時離れ。

読む者を理想郷に誘ってくれる。

すばらしい物語ばかりだったから。

もう、そんなすばらしい世界を読むことが出来ない、というのならば、せめて……

「……ジルヴァラさんのお墓があるのなら。
せめて、お参りしていききたいので、どなたか、教えていただけますか？」

「ねえよ！

そんなご大層なモノは！

なんせ、竜に丸飲み、だったんだ……」

痩せた男が、皮肉げに言いつのろうとしたとき。

男を押しつけて、ぬっと出て来たヤツがいた。

最初に僕に声をかけた片眼の男だ。

「墓は、ある。」

形だけでよければ」

「あなたは……？」

「魔剣士イヴォール。」

妹をみすみす竜に食われた、間抜けな兄だ」

墓標

ジルヴァラの墓。

その場所は。

まるで。

りるが、書く物語みたいに、キレイな場所だった。

白くちいさな墓碑は。

森と街との境界にある、一面の花畑の中に、ひっそりと、建っていた。

咲き乱れる色とりどりの花は。

暮れてゆく今日最後の陽の光を受けて、セピア色がかって見え…
…ひどく幻想的だった。

「ジルヴァラさんて……どんなヒトだったんですか？」

「良い魔法使いだった」

墓碑の前に膝をつく僕から、少し離れた場所にたたずむイヴォー
ルは、寂しそうに口を開いた。

「生まれた時から盲目だったが、魔法の才は、抜群だったな……
外を。」

光を見たことの無いジルの目の代わりを俺がやっていた。

……このたった一つの目を、兄妹二人で使っていたんだ。

アイツの目の代わりをしていたから、俺も魔法が使えるようになったんだ。

それに、魔法を学ぶ時だけじゃない。

戦う時も、いつも一緒だった」

見え無い方から竜が忍び寄り、彼女をさらって食うまでは。

言って、巨きな魔剣士はため息をついた。

「……そうでしたか……」

その話を聞いて、僕は胸が熱くなった。

「……見ず知らずのあんたが、妹のために、涙を流してくれるのか……？」

「いいえ」

魔剣士の言葉に、僕は首を振った。

「とうとう直接お会いすることは、できませんでした。」

……僕は、ジルヴァさんの書いていた物語をずっと読ませて貰っていたんです。

りるる・ふえありーという名前で書かれた物語は、とてもキレイで……大好きだった。

彼女の話を心待ちにしている方は、他にも多いというのに……残念です」

「りるる・ふえありー？
それは……？」

イヴオールが何か言いかけた、その時。

がおおおおん！！

大きな咆哮が聞こえたかと思うと。

森の上空から巨大な影が滑空して来た。

竜だ！

と思う隙も無い。

夕焼けの光を跳ね返して、普通の家一軒分ぐらいあるおおきな、
赤銅色に輝く竜は。

いきなり僕を足の力ギ爪に引っ掛けると、そのまま上空に駆け上
がった。

「……！」

驚きと絶望で、僕は、声も出なかった。

竜に捕まった！！！！

僕は、死ぬ。

この竜に喰われて、僕は死ぬんだ……！！

ジルヴァラさんのように。

その他、竜の牙の前に散った、名も無き人々と同じように！！

僕はパニックを起こしていた。

右手は、自由だったのに、抵抗することも忘れ、身動き一つ出来ないでいた。

その、僕の目の前に。

ひらり、と何かが舞った。

……え？

目の端に映った、それを見て、僕は息を呑んだ。

……蝶だ……！！

銀に輝く蝶が、いた。

ひらひらと、花畑を飛んでいるように、のんきそうに見えるのに。

妖魔最速の竜よりも速く高く飛ぶ、蝶が、いた。

まさか……！

僕の自由な手にまわりつくように、飛ぶ蝶を握りしめると。

蝶は、ズシッと重い剣に変化した。

「おい、あんた！

死にたくなかったら、その剣で竜を刺せ！！」

「……！！」

魔剣士に叫び声に言われるままに、僕は。

剣を竜に向かって振り回した。

と。

多分、魔法がかかっているかもしれない。

素晴らしく鋭い剣は、堅い竜のウロコを貫いた。

そのとたん！

うんぎゃゃゃあー！！

竜は、魂消えるほどの大声で鳴き。

僕を空中に放り出して逃げていった。

しかし、僕は……！

落ちる！

背の高い木々のてっぺんよりもさらに上から。

剣と一緒に風を切って落ちてゆく。

地面が迫る。

もうだめだ！

と、目を閉じる寸前。

地面と僕の間には、銀色の蝶が滑り込んだ。

その数、無数。

ちゅちゅちゅちゅ

僕の身体が触れる度。

蝶たちは、花に変化して、僕を包み…………

ばふっ！

色鮮やかな、花のクッションに信じられない気分で身を投げ出した。

「おおい！

大丈夫かあ！」

走ってくる魔剣士に、僕は、手を振った。

「…………死ぬかと思った…………」

「妹を亡くしたばかりなのに、そう人を竜に食わせるかよ！
それにあんたは……………」

魔剣士は、花の中に寝転んでいる僕に手を貸しながらいった。

「…………俺の話を読んでくれた」

「…………え？」

「俺が、りるる・ふえありーだ。

俺が、妹のために書いた物語を気に入ってくれて、ありがとう」

「なんだって！」

イヴォールは、目を伏せて言った。

「盲目で、強すぎる魔術の才を持った妹には、友と呼べる者はだれも居なかった。

だから、俺が。

妹のために、りるるという、架空の友人を作ってやり……
物語を力タっていたんだ……」

傷だらけの、ゴツい魔剣士は嘲う。

ああ。そうか。

だから、だつたんだ。

目の見え無い妹のために作った物語だったから。

りるるの物語は、あんなにも色鮮やかで、僕の心を打ったんだ。

「悪かったな。

りるるの正体が、こんなムサイ男で」

物語を力タる相手も死んだし、もう、俺が筆をとることはない、
と言うイヴォールに、僕は叫んだ。

「書いて下さい！」

今、あなたの物語を待っている人は、妹さんだけじゃない……！」

「ユウエル行きは、どうだったかね？
りるる・ふえありーは美人だったか？」

編集長の言いぐさに僕は、思いきり舌を出した。

「おかげで、死にかけました。
もう、絶対、行きませんからね！

……」
「行っただけど。
行っただけど。
行って良かったです」

りるる・ふえありーは、想像していた美人でも、可愛い女の子
でもなかったけれど。

その心は、とても、優しかったから。

だから、あの人が書いた物語は、キレイ何だとわかったから。

それがわかっただけでも。

僕は、命を賭けて、ユウエルに行ったかいたのかも知れなかった。

「それで、原稿は？」

編集長に言われて、僕は、首を振る。

「また、書いてくれるように、一杯お願いして来ましたが……」

……説得が。

僕の心がどれだけあの魔剣士に、伝わったろう。

帰りがけに、イヴォールは、僕に原稿をくれなかった。

「……考える」と言っただけで、帰る時間になっても部屋にこもって出て来なかったけれど。

僕は、信じる。

また、彼が筆をとってくれる事を。

窓から身を乗り出して、見上げた夕焼け空に、銀色の蝶が、一羽。

ひらり、と飛んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6754g/>

白銀の蝶

2010年11月3日14時21分発行